

巻頭言

『立命館実践教育研究』第5号の発刊にあたって

立命館大学実践教育学会会長

立命館大学大学院教職研究科長 森田 真樹

立命館大学実践教育学会は、大学内外で教育という営みに関わり教育・研究・実践に携わっておられる方々と共に、幅広くつながりながら実践研究、交流を深めていきたいとの思いから、2017年度に創設されました。立命館大学大学院教職研究科の教職員、院生、修了生を中心メンバーとしながら活動を継続しています。

私たちの取り組みを広く発信するとともに、様々にご指導いただくために、『立命館実践教育研究』を発行しています。『立命館実践教育研究』は、立命館大学実践教育学会の機関誌の役割とともに、立命館大学大学院教職研究科の年報・紀要の役割も担っています。研究科発足後2年目の完成年度に創刊号を発行しましたので、研究科としては6年目を終えるこの度、『立命館実践教育研究』の第5号を発行いたします。

この間、私たちの生活や学校に大きな影響を与えたコロナ禍も、完全に収束はしていないものの、マスク着用の個人判断や感染症法上の位置づけの変更が議論されるなど、アフター・コロナの時代の幕開けを予感するようになってきました。アフター・コロナの時代が、どのような時代となるのか予測することは難しい面もありますが、1つ確かなことは、コロナ禍前の時代に逆戻りすることはないということです。

コロナ禍は、学校の「当たり前」を改めて問い直す契機となりました。また、同時並行で進んでいる「令和の日本型学校教育」やそこでの「個別最適な学び」「協働的な学び」、その教育を支える教員の養成や研修のあり方、GIGAスクール構想と学校教育におけるICT活用、いじめ防止対策、コミュニティスクールのあり方などが、問題提起される段階から、着実に実施し、実装する段階に移行しています。

こういった状況において、私たちは、どこに軸足を置き、何を共有のビジョンとして、日々の学校における教育実践に向き合う必要があるのか、私たちの教育観、学校観、授業観などについて、「令和」の時代に即したあり方を熟慮し、再構築することが不可欠になっていると思います。様々な改革が展開している時代であるからこそ、過去の学校や実践を懐かしむのではなく、改革や変化を前向きに受け止め、積極的な姿勢で取り組んでいく必要があるのではないのでしょうか。

『立命館実践教育研究』第5号では、研究論文のみならず、立命館大学実践教育学会の研究大会など、この1年に研究科が取り組んだ様々な活動に関する報告も掲載されています。第5号に掲載された様々な論考の問題提起が、未来を生きる子どもにとっての最適な明日の学校の姿を考えるヒントとなることを期待しています。